

## いのちの奇跡

遺愛女子高等学校 一年 千田 風紗

その話を父から聞いてから、私は自分を、自分のすべてを大切にしようと思った。

中学校一年生の頃、私はいわゆる反抗期に差しかかりはじめており、また中学校に入り行動の範囲が広まったことにより、小学校時代より自分で考える機会も増えていた。そして一学期の終わり頃。中学校でできた新しい友達を私のささいな一言で激昂させてしまい、私は「死ぬ。」と言われた。それまでふざけて友達や家族に「死ぬ。」とか「消えろ。」などと言ったことも言われたこともあったが、それらは冗談でしかなく、いつも笑顔やおどけた表情が共にあった。そのため、強い剣幕で「死ぬ。」などと吐き捨てられたのは、私にとってははじめてのことだった。

今なら笑って解決できるような小さなことだが、当時の私はまだまだ経験が足りておらず、泣きこそしなかったものの、『友達に自分の生を否定された』という事実には、少なからず傷ついていた。

その後、私はなんとかその子と和解することとなったが、再び元の関係には戻れなかった。不登校になるほどでもなかったし、支えてくれる家族や友達の大切さを、私は再認識することができた。それでも少々落ちこんでいた私を見て、父が昔話をしてくれた。それは、私が産まれる時のことだった。

当時両親は札幌市に住んでいた。無事に出産予定日まで一か月ほどとなり、産後の準備もちゃくちゃくと進んでいた。そんな時、母のお腹の中で私が急にあばれだした。何かと病院の先生方が検査したところ、一刻を争う緊急事態だった。すぐに母は帝王切開となり、父が呼びだされた。慌ててかけつけた父が聞かされたのは、母子共に命が危ないということだった。私は胎内にいるうちも元気でよく動きまわっていた。それが裏目にでて、へその緒が首にからみついており、このままでは息ができなくなって窒息してしまうという。それどころか母にも負担がかかり、母までもが命を落としてしまうかもしれないというのだ。それを聞いた父は戦慄した。妻と子供を一ぺんに失うなんて。気がつくとは父は医者に叫んでいたという。冗談じゃない、妻と娘を救ってください、それが仕事でしょう。お願いします、と。

結果、母も私も助かり、一か月早いながら私は産声をあげることができた。しか

し、先生から呼びだされ、こんなことを言われたという。「脳や体にいく酸素が一時的に止まったことで、もしかすると脳や体の細胞の一部がおかしくなり、障がいが出るかもしれない。もしそうなら、三歳までには現れるだろう。」と。しかし、私は障がいを持つこともなく、大きな病もなしで、ここまで育ってきたのだと、父は教えてくれた。

最初、私はそれを聞いて驚いた。私がそんな危険な状態で産まれてきたなんてつゆほども思っていなかった。出産が予定よりも一か月早かった、とは聞いていたけれど、そんな理由であるとは想像もつかなかった。しかし何より驚いたのは、父がお医者さんに叫んだ、ということだった。父はいつも人当たりがよく、面白いことを言ってくれたりする優しい人なので、とても驚いた。そしてそれと同時に感謝した。父や母が、それほどまでに私を想ってくれていたことに。

その話が終わったあと、父はさらにつけ足した。人は、一つの卵子と精子が結ばれることで誕生する。しかしその卵子も精子も何億などという膨大な数があり、その中からできた奇跡のような確率から、私は誕生し、産まれる際も苦難を乗り越え、今ここにいる。それだけで素晴らしいことで、誇るべきことなのだ、と父は言った。それを聞いた時、私の体に電流のようなものが走った。私はこんなに、周りの人に大切にされているんだ、と気づいた。そして自分の体が、命が、奇跡の塊であると感じた。それだけで、幸せだった。父は私が産まれた時、そして成長していく過程で、幾度となく感動したという。当たり前だ、普通だと思っていた景色が輝いた気がした。

それ以来、私は私を大切に扱うようになった。そして周りの人も大切に思うようになった。元から自分を雑に扱っていた訳でもないが、自分も、そして周りも、気づいていなくとも、奇跡の中で生きていると分かったからだ。人間、誰しもいつまで生き、いつ死ぬのかなんて分からない。だからこそ、自分や周りのからだや命に敬意を払って、一日を大切に生きたいと思う。